

第36回 日本衛生検査所協会近畿支部学術研究発表会

パネルディスカッション

第1日目 (5月14日) 第5会場 (会議室D)

13:30~15:30 養成校はどんな臨床検査技師を育てたいか？

【S-81】 養成校の代表と卒業生(若手臨床検査技師)に聴く、将来の臨床検査技師像と卒前・卒後教育の在り方

コーディネーター：

佐守 友博 (日本食品エコロジー研究所)

司会：

壇上 松尾 収二 (天理医療大学医療学部臨床検査学科 学科長)

フロアー 宮崎 彩子 (兵庫医科大学 臨床検査医学講座 准教授)

パネリスト：

岩谷 良則 (大阪大学大阪大学大学院 医学系研究科保健学専攻 生体情報科学 教授)

坂本 秀生 (神戸常盤大学保健科学部 医療検査学科 教授)

西野 勝 (和歌山県立医科大学附属病院 中央検査部 病理)

岩本 弥生 (株式会社いかがく)

ミニレクチャー

第2日目 (5月15日) 第5会場 (会議室D)

14:50~15:50

【S-82】 問診からどのような検査を行い、診断をしているか

演者：山口 宏茂 (日本衛生検査所協会 近畿支部学術委員長)

S-81 パネルディスカッション（日本衛生検査所協会）

養成校の代表と卒業生(若手臨床検査技師)に聴く、将来の臨床検査技師像と卒前・卒後教育の在り方

佐守 友博
コーディネーター 日本食品エコロジー研究所

これからの臨床検査技師は医療において様々な活躍が期待できる。

現在までの臨床検査技師や臨床検査医の縁の下の努力が、今日の医療を支えるひとつの柱となっていることは、誰も否定することはできない。

これからの医療において臨床検査医学はさらに進歩を遂げ、検査法の標準化や基準値の概念の統合が行われると、臨床検査の精度管理の大部分は機械任せになることも考えられる。また、我々は、今は縁の下に永く居すぎて日の当たるところへ自ら出て行く活動に慣れていないが、これからの医療では日の当たる場所で働く時代が必ず到来する。臨床検査医学の進歩の恩恵を、すべての実地医家（臨床医）に享受してもらうためには、臨床検査技師や臨床検査センターがより一層の大きな役割を果たす必要が出てくると思われる。

今日は、司会として天理医療大の松尾教授、パネリストとして大阪大学の岩谷教授、神戸常盤大の坂本教授、和歌山県立医科大学付属病院 中央検査部 病理の西野勝技師（大阪行岡医療専門学校長柄校教務主任 小市加陽子先生紹介）および株式会社いかぐの岩本弥生技師（京都保健衛生専門学校教務部長 小澤優先生紹介）の計4名の方に登壇頂き、フロアーの皆様（フロアー司会：神戸大学 河野誠司先生）とともに標記のテーマで討論したいと考えている。

最初にパネリストに自己紹介を兼ねて卒前教育、すなわち養成校における教育についてお考えを披露頂く。特に2名の若い臨床検査技師の方には在学中を思い出していただき、卒前教育について発言いただく。次いで岩谷先生に、将来の臨床検査技師像についてご意見を頂き、これを口火にパネラーを中心にフロアーの皆さんも適宜、討論に加わって頂きながら臨床検査技師の卒前教育について討論したい。その際、検査センターにおいて指導的立場にある方から養成校に対し望むことを聴きたいと思っているので、フロアーからの積極的な意見も期待している。なお人材育成には卒前教育と卒後教育の連携が重要である。卒後教育も織り込みながら討論して頂く。

「臨床検査技師の業務独占ができないなら、業務拡大を」という宮島よしふみ氏（日臨技会長）の言葉通り、臨床検査技師は病院においても検査センターにお

いても、また他の検査関連企業・研究所においても、様々な分野職種で活躍の場を拡大していく必要がある。何故、ここ検査センターの学術集会において教育に問題を議論するのか。すでに働いている立場、臨床検査を実践している立場から卒前教育を議論する機会はほとんどなかった。若いときの教育は大変重要であり、卒業した者を引き受けている側の意見を聞くことは教育現場の先生方にも有益であろう。この議論をスタートラインにして、臨床検査技師の育成という我々にとって重要な課題を教育側・臨床側・雇用者側が一緒になって討議する機会が増えればと願っている。

S-82 ミニレクチャー（日本衛生検査所協会）

問診からどの様な検査を行い、診断をしているか

山口 宏茂
日本衛生検査所協会 近畿支部学術委員長

衛生検査所（以下：検査センター）では、依頼された検査項目に対して、正確に迅速に返却することが業務の中心となり、その向こう側に見える患者情報や、検査結果からどの様な診断、治療が行われているかは見えないことがほとんどである。検査センターが医療における最大の問題点ではないかと思うが、なかなか、情報を手に入れるチャンスは少ない。しかし、顧客満足の観点から、業務において、医療機関から検査に関する問い合わせが発生した際に、適切な回答が出来るスキルがあれば、信頼関係が強くなり、最も強い営業力になることと思われる。

そこで、今回、実際の症例を用意し、検査センターの立場では見ることが少ない、問診の取り方や、そこから、どの様な検査が診断に役立ったを提示し、医師が問診からどの様な検査を選択し、その結果がどうであったか、実際の症例（典型例）を中心に紹介する。

■症例の一部

症例① 骨粗しょう症で加療中に高Ca血症を認めた60歳代女性

症例② 腰椎圧迫骨折中に腹部（側腹部）の疼痛が出現した80歳代女性

症例③ 関節リウマチを否定されるも持続する関節痛の精査を希望した40歳代女性

症例④ 高尿酸血症で通院中に寝汗と動悸が出現した30歳代男性

症例⑤ 高尿酸血症で通院中に気力の低下、物忘れなどが出現した70歳代男性

など、症例を多数用意して、討議を行いたい。